

『春に思う』

「春という季節は、いつからいつまでなのだろうか」と思う時があります。当町を含めた渡島半島南部で推測しますと、大雑把な区切りでは3月～5月。ただ、3月上旬はまだ冬（「冬の終わり」）だと思っています。

3月の季節感は大変微妙です。気温の変化が激しく、寒の戻りも頻繁にあり、春の暖かさを実感できる日は稀だと思います。せいぜい「春の気配」を感じられる日が何日ある程度ではないかと。したがって、仕事上作成する文書においても、どのような時候の挨拶を使うかで少々悩めます。「啓蟄、早春、春暖」あたりが使いそうですが、タイミングや直近の気象状況などを踏まえながら選んでいます。

卒業式が、中学校は3月15日頃、小学校が3月19日頃ですが、かなりの頻度で雪が降ります。まさに「名残り雪」でしょうか。ですから、この段階でも、かなり寒いのです。式場内の暖房は欠かせません（今年は、どちらも好天で暖かかったです）。春分の日頃でも、強い寒気を引き寄せる低気圧の影響で、暴風雪になることもしばしばあります。

さて、卒業式の式辞冒頭では2～3行程で季節感を述べます。「・・・ここ江差町にも春の訪れを感じます」で括弧なのですが、その前段でどのような表現にしたらよいかでそれなりに苦労します。できるだけ、自分の五感で捉えた様子を表現するように心がけました。

まだ気温は低いので、周囲の植物の様子を扱うことは難しかったです。どちらかというと眼下の日本海の様子を取り上げることが多かったと記憶しています。私にとって最後となった式辞では、“晴れて風が穏やかな日、町内の砂浜（「繁次郎浜」）にうねるように打ち寄せる波が、力強さを増した日の光を受けて明るい青緑色になる様子を目にし、そこから春の気配を感じたこと”を盛り込みました。

冬の間、強い北西の季節風の影響で、眼下の日本海は大荒れの日が多く、その色は波がしらの白以外は鉛色に覆われています。約3か月余の間、そのような日本海を見続けていますので、穏やかなうねりと明るい青緑色の海を目にした時は、心が躍ってしまいます。

次に、植物という視点で春の期間を考えてみます。

まずは、フクジュソウ。日当たりのよい所ですと、3月中旬から見られます。ほぼ同じ頃にフキトウモも見られるようになります。これらから、春の始まりを感じます。その後、4月上旬から下旬の前半に、ミズバショウ（場所は、道南の国立公園の湖沼周辺。まだ冬枯れた灰色か薄茶色だらけの湿地に現れる鮮やかな白と緑のミズバショウは格別の感があります）が見頃になり、

少し遅れて4月の中旬から下旬かけてカタクリやエゾエンゴサクが見られるようになります。とりわけ、青色のエゾエンゴサクを見つけた時は、「ようやく北海道に本格的な春が来たな」と嬉しくなり、ついつい接近しまじまじと観察してしまいます。

そして、サクラが4月下旬の後半頃に開花し4月の末から5月の初め頃に満開（今年は、例年より早そうだという予想もありますが）。ここまで来ますと、「春本番」を迎えたなと感じます。締めくくりが、木々の新緑です。こちらは、5月の上旬から下旬の前半あたりでしょうか。この時季の峠道のドライブは最高です。若葉の淡い緑色は、目にも心にも優しく、とても癒されます。

春の風景でお気に入りが、二つあります。まずは、4月末から5月初め頃の二セコ連峰。青空を背景に、十分に白い輝きを保った残雪で被われた二セコの峰々の山容は、実にいい絵になります。もう一つが、5月の下旬頃に見られる、田植え前の水をはった田んぼです。青空の下の眺めもとてもいいのですが、夜、街灯や家の灯り（時にお月さん）が田んぼにはられた水に映る様子が実にきれいで、風情を感じます。

最後は、出来事から。

春は、別れと出会いが凝縮された季節です。社会人となってからは、毎年、3月中旬から4月初めまでのわずか2週間余の期間に、実に多く方との別れと出会いを繰り返してきました。その度に、「人生は、別れがあるから美しく、出会いがあるから素晴らしい」という先輩教員から教わった言葉を思い起こします。

昨年度は、新型コロナウイルス感染症のため、入学式を中止にした大学がほとんどでした（たぶん全てかと・・・）。先日（3／30）、都内のある私立大が1年遅れの入学式を行ったというニュースを見ました。「今日初めて大学内に入りました。講義は全てオンラインでした。入学式ができて嬉しいです。不安はありますが、頑張りたいです」とインタビューに応じた学生のマスク越しの表情は、喜びや希望そして意欲に満ちていました。思わず「頑張れ！」と、テレビに向かってつぶやいていました。

今回のコラムを書くに当たり、「時候の挨拶」について改めて調べたのですが、そこで「惜春（せきしゅん）」という言葉を知りました。「春の過ぎていくことを残念に思うこと」という意味だそうです。使える時期は、5月とのこと。実に味わい深い言葉であると思いました。機会があれば使ってみようと思っています。おそらく、新緑から深緑に変わり始める頃かなと。